
バカとテストと召喚獣 一発ギャグ大会

おだべば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 一発ギャグ大会

【Nコード】

N6198Y

【作者名】

おだべば

【あらすじ】

ある日、明久達はある大会に出場する事になった。それは学園長主催の一発ギャグ大会だった。ここで繰り広げる様々なショートコントや一発ギャグなどを明久達がやるという暇な人向けの小説である。果たして、優勝は一体誰の手に！？（是非この人にやってもらいたいネタなどを随時募集中です。ちなみに声優ネタやこの人にあつたネタなどが中心になるかもしれませんが、声優ネタに関しては作者がわかる物に限ります）

プロローグ 学園長からの通達（前書き）

多分面白くないと思うけど精一杯頑張っているおだげばです。一話
一話が短めなので暇な方は是非読んでみて下さい。

プロローグ 学園長からの通達

ある日、僕らは鉄人の補習授業を受けようと学校に登校してきた。しかし、そんな鉄人がある一言を告げた。

「お前ら、今日は補習をやるうと思っただげだな。実は学園長がお前らを呼んでいるそうさ」

鉄人が眉を寄せながら僕らに告げる。え？補習を後回しにして学園長が僕らを呼んでる？そんなのハツタリに決まってるじゃないか。

「なぜババアが俺達を呼ぶ必要がある。わざわざこんな補習日の時にそんな事をする意味がわからん」

「僕も同感だよ」

悪友の雄二とやつれた顔をしながら肩を竦める。だってあのババアが珍しく姫路さん達までを呼ぶなんて到底ありえないし、ましてやわけもわからずに呼ぶのは人としてどうかしてるにしか

「吉井、坂本。貴様らも早く行け」

「げっ！？姫路さん達もう行っちゃってるよ！」

「くそ！考えてる内にもうこんな目に！！」

すると鉄人が僕と雄二に廊下に指を刺しながら言ってきた。ってそい！？

「失礼しますババア」

「邪魔するぞババア」

「アンタ達は本当に威勢の良いバカ共だねえ」

五月蠅いぞ薄汚いおばあさん！さては僕らを陥れるために呼んだな！？

「明久君、あまりそういう事を言うべきではないと思うのですが」

「そうよアキ。どうして目上の人に悪口を言うのよアンタは・・・」

「

姫路さんと美波が学園長をかばうように僕を叱る。ええい！二人の言葉に惑わされるなクソババア！！

「それじゃ話が出来ないさね。これだからいつまで経ってもバカと言われるんだよ」

「これについては否定出来ない・・・。それで話って何ですか？」

僕は仕方なく学園長に尋ねてみる。すると、

「実は、アンタ達にはアタシが主催する大会に出場して欲しいさね」

なんて事を言ってきたよこの人。一体どんな大会なんだ？

「何かまた下らない茶番とかだろ？」

「違うよ。アンタ達には人肌縫いでもらおうと思ってるね」

「つまり学園長が言いたいのは？」

「一発ギャグ大会さ」

やっぱり下らない茶番だよ！雄二の言うとおりじゃないかッ！！
何が一発ギャグ大会だ！？こんなのただの

「これはちょっとした芝居みたいなものさね」

いや、そんなの確信してたまるか！性懲りもなくまた変な事を言
ってるよ！

「ちなみに景品もちゃんと用意してある」

「ですよね」

「気が変わるのが早いぞ明久・・・」

「ところでどうしてこの大会を開こうと思ったんですか？」

「それはアタシが面白い物を見たいからに決まってるじゃないか」

「つまり自己満足ってところだな」

内容も長そうだし、少しの間はこのババアの話の聞くしかなさそ
うだよね・・・。

プロローグ 学園長からの通達（後書き）

ご意見やご感想など心よりお待ちしております。

第一問 ルール説明とその内容

「ルールはそれぞれが出来そうなギャグを行う事さ。ジャンルは何でも構わないさね」

学園長ババアが僕らに説明するように言ってきた。ジャンルは何でもいいんだ。

「勝敗はそれぞれの評価によって決まるのさ。より評価が高かった方が優勝だよ。ただやるっていういかにもガキ臭い考えではないからね」

「それってどういう事ですか・・・？」

「何周かに渡って評価をする事さ。但し、それは参加人数によるけどね」

何周かに渡って行うって？それじゃ日が暮れるじゃないか。

「つまり僕が最初だったら後の人が終わった後にまた僕がやるっていう例ですか？」

「そういう事さね。寧ろ一回つきりじゃ勝敗はわからないからね」

「まあババアはそう考えるだろうな・・・」

雄二が野性味たつぷりの不機嫌さで学園長を蔑む。まあ僕が見る限りでは下らなさそうな謙虚な面を見せるわけだよな。

「残りの説明は始まる時にまた説明するさ。一時間後に開催するから早く準備してきな」

「あっさり命令あれてるけど・・・」

「面白そうじゃのう。ワシとて演劇の参考になるかもしれないの

「じゃ」

本当にそれでいいのかい秀吉ほくのよめ！？演劇の参考になるとか言っけど結局は学園長が仕掛けた下らない茶番にしか思えないよ………。

「それでは、失礼しました」

「早く行くぞ明久。いつまでもババアとお茶会気分になっているな」

「言われなくたってわかってるよ……」

違和感てんこ盛りの気分になりつつ、僕達は教室に戻る事にした。

「さて・・・、どういうギャグが思いつくかな」

「雄二は流石にやりたくないと思ってるでしょ？」

「ったりめえだ。何で俺までこんな御託に付き合わなきゃならねえんだよ」

それはそうだ。僕だってあの老婆の言葉は傲慢過ぎる。そういえば姫路さんと美波はどう思ってるのかな？

「明久君、私はちょっと自身ないと思います・・・」

「それはそうだよね。姫路さんには難しい内容だと思うよね」

「だったらウチはどう思うのアキ？」

「美波は乱暴でいっつも凶暴な態度を取るから姫路さんとは段違いに僕の鎖骨が不思議と言っていいくらいに痛い痛い痛いッ！
！」

「アンタはいつまでウチを尽く弄んだら気が済むのよーッ！！」

間違った！つい本音を語ってしまった！！これじゃあただの苛め

じゃないか！

「……………そうやって葉月には優しいくせに。アキのバカ……………！」（ボソツ）

「明久君、あまり美波ちゃんを困らせちゃいけませんよ……………？」

「はい、ごめんなさい」

姫路さんが困った顔で僕に注意してくる。わかってるよ。わかってるのに……………。

「ちょっと考えさせてよ」

「何をだ？」

「とびつきり良いギャグを考えるんだよ」

「まあ小学生並みの頭脳のお前なら出来るか」

「そこは高校生の頭脳って言っただけ欲しいな……………」

すると雄二が呆れるように答えてきた。くそ、このゴミ虫め。いつになったら僕の悪口を言う癖が直るようになりやがるんだ。

「…とは言つものの、どついつギャグにすればいいんだろ……………」
「……………」

開催まであと五十分。少し間に合わないかも。

第二問 参加メンバー集め

僕達は約一時間後に開かれる一発ギャグ大会に向けて様々なネタを考えていた。

「・・・なかなか良いネタが思いつかないな」

「僕も一緒だよ。こんな下らない茶番に付き合っくらいなら家でのんびりする方がマシだよ」

悪友と一緒に困ってしまう。くそ、鉄人が僕達を呼ばなきゃこんな面倒な大会に参加する事なく気楽に遊んでいたのに……。僕はなんて運が悪いんだ。

「それより、俺達以外でもこの大会に参加する可能性もあるかもしれない」

「だったら霧島さんにも協力させておかなきゃね」

「お前は どうして俺がこれに出るのが前提で翔子を呼ぶ事に違和感を感じないんだ・・・」

僕の言葉を否定するように雄二が呆れている。この野郎、霧島さんを入れる事自体に何も違和感なんてないだろうに……。この大会が終わったらこのクソ虫を肅清する必要があるな。

「でもAクラスの場合はあまり興味なさそうだね」

「それ以前に今日は俺達しか学校に来てない。何人か出るっただどうしようもないだろうな」

「・・・そんな事もない」

「ゲエツ!? 翔子!?!」

あ、霧島さんがやってきた。

「……………既に他のメンバーを呼んでる。だからこの大会は雄二と一緒に優勝する」

「待て！俺はお前と一緒に優勝するつもりはないぞ！？」

「まあまあ。霧島さんは雄二が出るなら出場するって感じだし」

「……………ご名答、吉井」

やった！僕の直感が当たった！って関心してる場合じゃないかっ
た！

「……………まあとりあえず話を聞かせてもらおうか翔子」

「……………実は先週、高橋先生から話を聞いた。来週の週末に開催されると」

「ふむふむ、高橋女史も結構太っ腹だね」

「それとはわけが違うぞ明久」

へえ〜。Aクラスも参加するって事になったのなら、他の人もくるかもしれないね。ってあれ？それだったら他のクラスでもその話を聞かされてるって事かな…………？

「……………ちなみに、その話は全クラスに伝わっている」

「やっぱりなって程でもないがとりあえずおかしいだろ！？」

「案の定、全クラスが参加するのか！？」

霧島さんが躊躇なく話しを進めていた。じゃあこの話を今までしてなかったのは唯一Fクラスだけというわけじゃないか！？くそ鉄人め…………！いつかあの世へ送ってやる……………！！

「……………細かいルールは既に聞かされた」

「やっぱり俺達だけか！あのうざい大人に弄ばれているのは！」
「何てこったんだ！！あのババア、後で引導を渡してやる！」

閑話休題。

「それで、翔子はどんなネタにするんだ？」
「……私には雄二と一緒にやりたい」
「どうしてだ」
「……どうしても」

やっぱり霧島さんは強気だなあ。それに比べてあの脳なしのバカ
はいつまで経っても学習しないな。

「それだったら僕らでメンバー集めでもしようか」

「そうだな。Aクラスや他のクラスが出るって事だから全員来てはるはずだな。とりあえず交渉といこうか」

雄二が立ち上がるように答えた。そうだよな。僕達がどうかしなかつたらあの大会の意味はないと思うけどな。

「……………私も手伝う」

「ありがとう霧島さん。お礼に秘密の話を教えてあげるよ」

「……………ありがとう吉井」

「おい明久。それはどういう風の吹き回しだ」

「それじゃ、早く行こうか！」

「って話を聞けよこの野郎!!」

あのバカは放っておいて、時間までに参加するメンバーを集めないとね！折角霧島さんもいるのしっかりしなきゃ尺に合わないから！

第二問 参加メンバー集め（後書き）

ご意見ご感想を心よりお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6198y/>

バカとテストと召喚獣 一発ギャグ大会

2012年1月13日13時50分発行